



『徒然草』の中に「高名の木のぼりといひしをのこ」という一段があります。「高名の木のぼり」とは、木登り名人といわれて評判の高い男という意味です。その名人が、他の人に木登りをさせるのですが「高い木の上の枝を切れ」と指示します。登った男が枝を切って降りるとき、名人は何も言わずに黙って見えています。そしてあと少しで無事に下に降りられそうになったとき、名人はじめて男に声をかけました。

「あやまちすな。心して降りよ」と。

傍で様子を見ていた兼好は、不思議に思ったはずねました。「危ない上の方のときは黙って見ていて、飛び降りても怪我などしない低いところに来たとき、どうして心して降りよと言うのですか」と。

名人いわく「そのところですよ。目がまわって枝も折れそうなところは、本人が恐れているので、傍からは何も言いません。失敗は安全なところになって必ずしでかすものです」と。名人のことばに兼好は「聖人のいましめにかなへり」と感じ入っています。

慣れは、時には懈怠や油断を生じ、危うさを招きかねないもの。日常の用心としたいものです。